○○してみました世界のフィールド

アンデスの聖地をめぐる

八木 百合子　民博 機関研究員

聖地の土産物店にて

アンデス山岳地帯に点在するキリスト教の聖地。
けわしい道のりを経て、なぜ人びとは聖地へ向かうのか。
筆者自らが訪れて、見えてきたこととは。

祈りの地の姿

五〇〇〇メートル級の山々が連なるペルーのアンデス山岳地帯。この山間の地に「セニョール・デ・ワンカ（ワンカのキリスト）」という霊験あらたかな聖地がある。キリスト教世界では、イエス・キリストや聖母マリアが人びとの前に突如あらわれたという奇跡譚をよく耳にするが、ここペルーも例外ではない。ワンカの聖地は、キリストが出現したことに始まる。その起源は一七世紀に遡るが、今でも聖地のあるクスコを中心に人びとの篤い信仰の対象となっている。とくに病気治癒の神として知られ、白人やメスティソ（混血の人）から先住民に至る多くの信仰を集める。だが、その背後には、古くから山々を崇拝してきたアンデス独自の信仰があるのも確かである。

神々の奇跡や名声はもちろんだが、実際に聖地の空気を味わうことで、人びとがそこへやってくる理由が見えてくるのではなかろうか。そんな思いから、ワンカの聖地を訪れてみた。

ワンカの聖地は、クスコ市から南へ五〇キロメートル行った山の裾野（標高三一〇〇メートル）に位置する。巡礼者の多くは徒歩で向かい、しかも日帰りで行ける。加えて、バスや車での移動も比較的容易で、市内から聖地のある山の麓までは舗装されたゆるやかな道路が続く。

毎年九月一四日には祭礼がおこなわれることもあり、特にこの日を目指して多くの人びとが巡礼をする。わたしも聖地の賑わいを一目見ようとその日に合わせて向かった。真夜中に市内を出発してから歩くことおよそ六時間。朝日が昇るころ、ようやく聖地のある山の登り口に辿り着いた。そこから更に坂道を登ること三〇分。ついに教会堂が見えてきた。

集まった巡礼者がひしめき合う教会堂では、繰り返しミサが挙げられ、そばにある礼拝堂も願いを込めて灯した蝋燭で熱気に包まれていた。しかしそこから一歩離れ、聖なる空間の外に目を向ければ、ひとたび聖地に到着し、ミサを終えた人びとが、旅の疲れを癒しつつそれぞれの時間を楽しむ姿があった。汗を流すために沐浴をする人、持参した風呂敷のなかの食糧を広げて空腹を満たす人、木陰で仮眠をする人、草原で戯れる親子などさまざまである。

苦行の道のり

アンデスでは有名な聖地といえば辺境の地にあることも少なくない。だからこそ、そこへ行く醍醐味やありがたみがあるのかもしれないが、その道中はまさに苦難の連続であったりもする。かつてわたしが訪れたコチャルカスの聖母の聖地は、「しわくちゃにした紙のような地形」として知られる、入り組んだ山間の地域にある。標高三〇〇〇メートルを超える聖地までは、町からバスで二時間。切り立った山の斜面を縫う道路は狭く、車がすれ違う度に崖から落ちるのではないかという恐怖に襲われた。聖地に着いてからも宿はなく、運が良ければ仮設の小屋で仮眠をとれるが、大半の巡礼者は教会の前の広場で寝袋や毛布にくるまり野宿をする。巡礼がおこなわれた九月はアンデスでは真冬である。聖母を参詣した感動はもとより、仲間たちと身を寄せながら過ごした一夜は、なんとも苦行であったことを記憶している。しかし、終わってみれば不思議とまた次への挑戦を掻き立てられるのである。

受け継がれる体験

聖地を訪れる人は、家族連れや友人同士あるいは同じ村の人のあいだで巡礼者を募ってやってくることが多い。苦行をともにする家族や仲間は何よりも心強い存在である。なかには一度ならず、幾度となく聖地を訪れた経験のある人も珍しくなく、自らの記録を誇らしげに語る人もいる。そこには、かつての思い出とともに再び聖地を訪れる人もいる。子どものころに親と一緒に来た人が大人になって、今度は自分の子や家族と巡礼にやってくる。奇跡に限らず、こうした体験が受け継がれてきたことが、今でも聖地へ訪れる人が絶えぬ所以のひとつだろう。

ちなみに、アンデスにはコイリュ・リティというもうひとつ有名な聖地がある。毎年祭典の時期には、各地から多数の巡礼団が訪れ、その数は十万人を超えるという。ただ、標高四六〇〇メートルの雪山を歩くこの巡礼はかなり難易度が高そうである。

教会堂のある山の上からの眺望。麓には巡礼者を乗せたトラックやバスが次々に到着する

巡礼者の姿。写真は隣県プーノからやってきた先住民

セニョール・デ・ワンカの教会堂